パーソナリティ研究
2006　第14巻　第3号　266–280

原　著

© 日本パーソナリティ心理学会 2006

中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連[1)]

石毛みどり　　無藤　隆
お茶の水女子大学人間文化研究科　白梅学園大学

レジリエンスは困難な出来事を経験しても個人を精神的健康へと導く心理的特性である．中学生905名を対象に，レジリエンスとCloningerの7次元モデルの特性との関連，およびそれらの関連の性差を検討した．その結果，レジリエンス尺度は「意欲的活動性」「内面共有性」「楽観性」の3因子構造だった．男子の場合，「意欲的活動性」と「自己志向」および「協調」とが，そして「内面共有性」と「協調」とが有意な正の関連を示した．女子の場合，「意欲的活動性」と「自己志向」，「内面共有性」と「報酬依存」とが有意な正の関連を，「楽観性」と「損害回避」とが有意な負の関連を示した．

キーワード：レジリエンス，JTCI (Junior Temperament and Character Inventory)，中学生，性差

問　題

青年期前期では，個人は身体的成熟の開始や親との関係の再編成などの発達的出来事や，小学校から中学校への切り換わりといった社会的移行を経験する．とりわけ中学校段階では，小学校からの移行に伴い，学業面で学級担任制から教科担任制への転換や学習内容の高度化，対人関係面で友人や教師との新たな関係づくり，加えて部活動への参加などさまざまな変化を経験する．これらの変化はストレスを引き起こし，種々の不適応現象として顕在化しているという．たとえば，学業活動や友人関係がストレッサーとなり，抑うつ・不安感情や無力的な認知・思考傾向などのストレス反応が表出している（岡安・嶋田・丹羽・森・矢冨，1992）．また，中学校段階のいじめや暴力行為の発生件数や不登校生徒数は小学校や高等学校に比べると著しく高い（文部科学省，2004）．さらに不登校回避感情をもっていても不登校行動に表れない，いわゆる不登校予備軍が存在し，不登校現象は不登校予備軍を合わせると，中学生の67%近くに及ぶといわれる（森田，2003）．しかし，友人との交流は親との関係における自律性の獲得やアイデンティティの形成をする上で重要な役割をする．そして学業活動は知的発達を促進する．発達の過程では，何らかのストレスを感じても，経験する出来事をうまく乗り越えなければならないだろう．

近年，発達精神病理学の分野では，ストレスフルな出来事の克服を可能にする資源としてレジリエンス（弾力性）が注目されている．レジリエンスとは，困難な環境にもかかわらずうまく適応する過程・能力・結果と定義される (Masten, Best & Garmezy, 1990)，適応に関わる幅広い概念である．概念の広さ故にとらえ方は研究者によって多様である．レジリエンスを過程ととらえる立場では，悪条件の下で個人的要因と環境的要因とが作用し，肯定的な適応に至るダイナミックな過程に注目する (Luthar, Cicchetti & Becker, 2000)．そして，

1) 本研究を行うにあたり，ご助言頂きましたお茶の水女子大学の菅原ますみ先生に厚くお礼申し上げます．また，調査にご協力頂きました中学校の校長先生，学級担任の先生方そして生徒の皆さまに心より感謝申し上げます．

悪環境下の子どもたちが有能さを発揮する過程が縦断研究で報告されている (Werner & Smith, 1992; Felsman & Vaillant, 1987)．一方，レジリエンスを個人の能力・特性ととらえる立場では，心の健康を保つ適応力に注目する．Flach (1997) は，レジリエンスを，ライフステージの移行やライフイベントで生じるストレスのために心理的にネガティブな状態に陥っても，混乱した状態を統合し，新しい生き方を発見して，自己を立て直す内的な力であるとする．個人は変化とその克服を繰り返すことによって強化され，成長するという．そしてレジリエンスの要素として，創造性，忍耐強さ，洞察力，精神的自立性，そして社交性などをあげている．また，Wagnild & Young (1993) は，過去にネガティブなライフイベントを経験したにもかかわらず心理社会的にうまく適応している成人を対象に，質的および量的調査により，決断力，自信，忍耐強さを表す「人格的能力 (personal competence)」因子および自己受容や目的意識を表す「自己・人生受容 (acceptance of self and life)」因子をレジリエンスの構成要素として見出している．

国内では，小塩・中谷・金子・長峰 (2002) が，精神的回復力と記述して，大学生を対象に興味や関心の多様性を表す「新奇性追求」，自分の感情をコントロールする「感情調整」，将来に目標をもつなどの未来に対する肯定的な志向性を表す「肯定的な未来志向」の 3 因子を見出している．そして，苦痛に満ちたライフイベントを経験したにもかかわらず自尊心が高い者は，そのような経験をして自尊心が低い者よりも，精神的回復力が高いことを報告している．また，石毛 (2002, 2004) は，中学生を対象に質的および量的調査によりレジリエンス尺度を開発し，ねばり強く問題を解決しようとする「意欲的活動性」，ネガティブな心理状態を立て直すために他者との内面の共有を求める「内面共有性」，物事をポジティブにとらえる「楽観性」を見出している．そしてこれらの 3 因子がレジリエンスの高い者の特徴，すなわち，問題解決への意欲 (Lösel, Bliesener & Köferl, 1989)，根気強さ (Prior, 1999)，自ら意志決定し実行する意志の強さ (Werner, 1986)，他者に援助を求める傾向 (Flach, 1997)，楽観的な傾向 (Kumpfer & Hopkins, 1993; Flach, 1997) を反映することを検証している．さらに，「楽観性」は無気力感とは負の，自尊感情とは正の，「意欲的活動性」はコーピングの「あきらめ」のタイプとは負の，「積極的対処」と「思考の転換」のタイプとは正の，そして「内面共有性」は「サポート希求」のタイプとは正の関連があることを明らかにしている．また，ストレスの高い高校受験期の中学 3 年生の「意欲的活動性」と「楽観性」が受験前のストレス反応の抑制および受験後の成長感の向上に寄与することを明らかにしている（石毛，2005）．

このようにレジリエンスの概念では，ストレスのために一時的にダメージを受けても後には回復できるという心理面の弾力的な特質に注目する点が特徴である．類似する概念としてコーピングやハーディネスがある．コーピングはストレス反応の抑制を目的とし（坂田，1989），適応を促進するが，それによって成功したかどうかという結果ではなくむしろプロセスに注目する (Compas, Connor-Smith, Saltzman, Thomsen & Wadsworth, 2001)．一方，レジリエンスは適応状態に至ったという結果を重視する，効果的なコーピングであり (Masten et al., 1990)，対処能力と内的な適応状態の維持の両方を含む (Murphy & Moriarty, 1976) 点で従来のコーピングと異なる．

また，ハーディネスは逆境下での心理的強さを表す点でレジリエンスと共通する．しかし，ハーディネスの概念では，ストレッサーをポジティブなもの，またコントロールが可能なものと見なす (Kobasa, 1979) ため，ハーディネスが高い者はストレッサーをストレスフルな出来事として知覚せず (Banks & Gannon, 1988)，身体的にも情動的にも不健康に陥らないという (Kobasa, 1979)．つまりハーディネスはストレッサーに挑戦する強さを

表す．一方，レジリエンスはストレスによる苦痛から立ち直る強さを表し，2者は異なる．本研究ではレジリエンスを個人の能力・特性ととらえ，「ストレスフルな状況でも精神的健康を維持する，あるいは回復へと導く心理的特性」と定義する．

ところで，Prior (1999) は，低収入層や崩壊家庭の子どもたちを対象に，生後4ヶ月から12歳まで行った縦断研究で，逆境下では根気強さのような気質は，対処方略を探してそれを試し実行する努力を促進すると報告している．また，詫摩・大山・柏木 (1998) は，発達の初期から個人に備わる気質のような個人側の条件は，「社会の側の働きかけを規定する媒介要因として働いて，やがて性格とか，あるいは動機やさらにコーピング・スタイルなどの特質をかたちづくる」と述べている．よって，対処能力の側面をもつレジリエンスはパーソナリティと関連があることが推測される．

パーソナリティは，児童期までは気質のような生得的な素質と養育行動などの環境要因との相互作用によって形成され，自己の内面に目が向けられるようになる青年期に入ると，本人の主体的努力もその形成に関与するといわれる（詫摩，1967；鈴木，1992）．梶田 (1992) によれば，自分自身を何らかの特性を持つ者（たとえば「自分はおとなしい子だ」のように）として意識するようになる児童期あたりから，自己意識（自分自身についての今ここでの意識）は一定の構造をもつ自己概念として定着してくるという．すなわち，青年期前期にあたる中学生の時期は，自分の性格や能力や行動などへの関心が高まり，過去の経験や自己について（自己概念）の見直しを行い，パーソナリティ形成に能動的に関わり始める意味のある時期といえる．そしてこの時期は思春期にあたり，特に心理的に不安定で，抑うつ傾向なども強いといわれる (Ge, Conger & Elder, 2001)．また，受験勉強による圧力を感じる中学生も多く，レジリエンスのような特性が意味を持つと考えられる．よって，中学生の時期のレジリエンスと，より安定的なパーソナリティとの関連を検討することにより，レジリエンスの発達・形成，そして適応を維持するための支援や教育のあり方について有効な示唆が得られると考える．

これまでにパーソナリティとレジリエンスとの関係はビッグファイブとの間で，レジリエンス（精神的回復力）と，神経症傾向と負の，開放性および誠実性とは中程度の正の相関があることが報告されている（中谷・小塩・金子・長峰，2002）．しかし，他にはまだレジリエンスとパーソナリティとの関連を検討した研究は先行研究を概観する限り見あたらない．ビッグファイブは，「他者を観察しその個人差を記述する特性語や質問紙から導かれた」モデルで，特性用語によってパーソナリティを包括的に理解しようとする（辻，1998）．近年，英語圏だけでなくいろいろな文化圏で普遍性が確かめられ，国内でも質問紙の開発や尺度の標準化が試みられるなど研究が進んでいる（村上・村上，1999；下仲・中里・権藤・高山，1998；辻，1998；和田，1996）．

一方，パーソナリティの生物学的基盤に着目するパーソナリティ理論のひとつに，Cloninger, Svrakic & Przybeck (1993) の7次元モデルがある．7次元モデルではパーソナリティを気質と性格の2つの構成体としてとらえる．Cloninger et al. (1993) によると，気質は刺激に対する情動反応の個人差を表し，遺伝的規定性が強く，生涯を通して比較的安定しているとされる．性格は気質を基盤にして自己概念の洞察学習を通して形成される．そして気質と性格とが相互に影響し合ってパーソナリティは発達するという．気質は Novelty Seeking（新奇性追求），Harm Avoidance（損害回避），Reward Dependence（報酬依存），Persistence（固執）の4次元，性格は Self-Directedness（自己志向），Cooperativeness（協調），Self-Transcendence（自己超越）（括弧内は日本語版下位尺度名）の3次元から成る．最近，「新奇性追求」とドーパミン (Benjamin, Patterson, Greenberg, Mur-

phy & Hamer, 1996)，「報酬依存」・「固執」とセロトニン (Ebstein, Segman, Benjamin, Osher, Nemanov & Belmaker, 1997) との関連が議論され，7次元モデルの理論的仮定は実証されつつある．また，日本人（15～27歳）において双生児法による検討の結果，気質特性は一部を除きすべて遺伝が共有環境を上回る，性格特性は概ね共有環境が遺伝を上回る寄与率を示し，Cloninger et al. (1993) の理論の妥当性が支持されている（安藤・大野，1998）．原版を基に児童生徒用の日本語版の尺度も作成され（青山・杉浦・菅原・北村・木島，1997），国内の児童生徒を対象に信頼性が検証されている．このように7次元モデルは生物学的基盤に着目し，それを基に発達的視点でパーソナリティをとらえる点が特徴的である．

本研究では，レジリエンスの発達・形成に関わる視点から，Cloninger et al. (1993) のパーソナリティ理論を取り上げ，パーソナリティ形成に主体的に関与し始める時期の中学生を対象に，レジリエンスとパーソナリティとの関連を検討する．レジリエンス（尺度の作成過程は後述する）は石毛 (2002, 2004) の，7次元モデルの特性は Cloninger et al. (1993), Svrakic, Svrakic & Cloninger (1996)や木島・斎藤・竹内・吉野・大野・加藤・北村 (1996) の先行研究を参照し，仮説を設定した．

7次元モデルの気質特性は刺激に対する情動反応の個人差を表し安定的である．他方，性格特性は気質を基盤にしつつ環境に規定される．また，性格特性は自己概念，および自己と他者との関係や自己と自然との関係の理解といった個人の主体的な側面を表す．そして，性格特性は加齢とともに変化する (Cloninger et al., 1993)．一方，レジリエンスの「意欲的活動性」は，自分でいろいろな方法を模索しながら失敗してもあきらめずに最後まで問題を解決しようとする意志を反映し，個人の経験などによりある程度の変化の可能性が予測される．よって「意欲的活動性」は性格特性との関連が推測される．また「内面共有性」は不安や喜びといった情動に触発されて他者との内面的なつながりを求める傾向を表す．よって，情動面を反映する点で気質と，そして他者との関係性を指向する点で性格特性との関連が推測される．そして「楽観性」はもののとらえ方を表し，認知的スタイルとの関連が強く，気質や性格特性との関連は弱いと推測される．この想定のもとに，レジリエンスと，気質特性との関連 (A) および性格特性との関連 (B) を次のように仮定した．

仮説 1-A　「意欲的活動性」は，「固執」と有意な正の関連をするが，「新奇性追求」「損害回避」および「報酬依存」との関連は弱いだろう．「新奇性追求」や「損害回避」や「報酬依存」はそれぞれ新奇的な刺激，危険を及ぼす刺激，他者の温情といった報酬となる刺激に対する情動反応を表すのに対して，「固執」は物事に集中する熱心さや辛抱強さを表す側面をもつ．よって，「意欲的活動性」は性格特性との関連が推測されるものの，意志の強さを表す側面をもつ点で，「固執」との正の関連を仮定した．

仮説 1-B　「意欲的活動性」は，「自己志向」および「協調」と有意な正の関連をするが，「自己超越」との関連は弱いだろう．「自己志向」は，自己決定および意志の力 “will-power” を基本概念とし，目標を決めて行動する側面，問題解決の能力を表す側面，努力する側面をもつことから，「意欲的活動性」と正の関連を仮定した．そして中学生の，クラスに調和していこうとする協調性は学業活動や学級での様々な活動の動機づけになり，協調心はやる気を促進する（谷島・新井，1995）ことから，「意欲的活動性」と協力を重視する「協調」との正の関連を仮定した．一方，「自己超越」は自己を忘却する点で意志の強さに着目する「意欲的活動性」との関連は弱いと仮定した．

仮説 2-A　「内面共有性」は，「損害回避」および「報酬依存」と有意な正の関連をするが，「新奇性追求」および「固執」との関連は弱いだろう．「内面共有性」は自己を開示して他者との内面的

なつながりを求める心性である．そして自己開示度は親和欲求と正の関係がある (Ando, 1978)．よって，「内面共有性」と，危険や損害を及ぼす刺激を回避する「損害回避」，そして自分の気持ちを知って欲しいあるいはそばにいたいという他者への愛着に依存する「報酬依存」との正の関連を仮定した．一方，「新奇性追求」は新奇的な刺激への反応を，「固執」は行動の持続性を表すことから，これらと他者との関係に着目する「内面共有性」との関連は弱いと仮定した．

仮説 2-B 「内面共有性」は，「協調」と有意な正の関連をするが，「自己志向」および「自己超越」との関連は弱いだろう．「協調」は他者の気持ちや意見を受け容れる側面をもつことから「内面共有性」との正の関連を仮定した．一方，「内面共有性」は他者との関係に着目する点で，意志に着目する「自己志向」や自然との関係に着目する「自己超越」との関連は弱いと仮定した．

仮説 3-A 「楽観性」は，「損害回避」と有意な負の関連をするが，「新奇性追求」「報酬依存」「固執」との関連は弱いだろう．「楽観性」は特性との関連は弱いと推測されるものの，物事をポジティブに考える傾向は，「損害回避」の心配性あるいは悲観的な側面と負の関連があると仮定した．

仮説 3-B 「楽観性」は，「自己超越」と有意な負の関連をするが，「自己志向」および「協調」との関連は弱いだろう．「楽観性」は特性との関連は弱いと推測されるものの，「自己超越」の自己を忘却し宇宙全体との一体感をもつ側面は，事態を前向きにとらえる傾向を助長すると考え，「自己超越」との正の関連を仮定した．「楽観性」は，もののとらえ方を表し，認知的スタイルとの関連が強いと考え，他の気質・性格特性との関連は弱いと仮定した．

分析は次の理由により男女別に行う．中学生の時期は男子より女子の方がストレッサーの評価が高く，またストレス反応の表出も多いこと（岡安ほか，1992；嶋田，1998），そしてこの時期に見られる抑うつ傾向は男子より女子の方が強いこと (Ge, et al., 2001) など，心理的傾向に男女差があるためである．また，内面の共有を動機づけとする自己開示行為の度合は1年生より3年生の方が多い（榎本，1997）ことや，自己形成や自己実現に関する態度や意欲は小学校高学年から高校にかけて変化する（梶田，1992）ことが報告されているためレジリエンスとJTCIの学年差についても調べる．なお，性差および学年差については先行研究が蓄積されていないため探索的に調べる．

以上により，本研究の第1の目的はレジリエンスとパーソナリティ特性―7次元モデルの特性―との関連を検討することである．そして，レジリエンスとパーソナリティ特性の学年差と性差および2者の関連の性差については探索的に検討することを第2の目的とする．

方　法

調査対象および手続き 調査対象は首都圏の公立中学校2校の，1年生281名（男子139名，女子142名），2年生337名（男子186名，女子151名），3年生313名（男子184名，女子129名），合計931名（男子509名，女子422名）である．学校に質問紙の配布と回収を依頼し，担任の指導で授業時間に集団で実施した．回答に不備のあった者を除き，1年生275名（男子136名，女子139名），2年生330名（男子183名，女子147名），3年生300名（男子172名，女子128名），合計905名（男子491名，女子414名）を分析対象とした（有効回答率97.2%）．

調査時期 2004年2月−3月

使用尺度　レジリエンス尺度 本尺度は国内の中学生用のレジリエンス尺度として作成された（石毛，2002, 2004）．つらい出来事を経験した時の落ち込みからどのように立ち直ったかという内容の面接調査から項目収集され，質問紙による予備調査と本調査（中学1年生516名，2年生353名，3年生349名，合計1,218名対象）によって，

「意欲的活動性」,「楽観性」,「内面共有性」(「意欲的活動性」と「内面共有性」は，因子の内容をより明確に表すために石毛 (2004) の「自己志向性」と「関係志向性」を名称変更した）の 3 因子が抽出された．Cronbach の α 係数は「意欲的活動性」は α=.76,「楽観性」は α=.64,「内面共有性」は α=.74 の値を得,「楽観性」の値は若干低いものの内部一貫性が確かめられた．前述のように，内容的妥当性はレジリエンスの高い者の特徴を記述した先行研究から，構成概念妥当性は無気力感，自尊感情および既存のコーピングとの関連を検討することによって確認された．

既存のレジリエンス尺度（Wagnild & Young, 1993; Jew, Green & Kroger, 1999; 小塩ほか，2002）と比較すると，楽観的傾向を表す項目は共通であるが，本尺度では自ら問題を解決しようとする自立的な傾向が「意欲的活動性」として，他者との内面的な共有を求める傾向を表す項目が「内面共有性」として 1 つにまとまっており，発達的に独立意識が高まる，そして児童期までの他者との表面的な関わりからより親密な対人関係へと深まる青年期の特徴が反映されている．

本研究では「内面共有性」因子の項目が少ないので 4 項目を追加し，合計 26 項目について尋ねた．所要時間は 40 分程度だった．回答形式は，「まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」までの 4 段階評定である．3 因子を想定し，本データについて因子分析（主因子法・プロマッ

Table 1　レジリエンス尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転後）

項目番号	項　目	$F1$	$F2$	$F3$	共通性
<第 1 因子　意欲的活動性>（α=.79)					
4	難しいことでも解決するために，色々な方法を考える．	.60	−.06	−.06	.32
3	失敗してもあきらめずにもう一度挑戦する．	.59	.01	.00	.36
1	決めたら必ず実行する．	.56	−.09	.01	.29
2	つらい経験からも，学ぶことがあると思う．	.56	.11	−.10	.33
8	やり始めたことは最後までやる．	.55	−.02	−.03	.28
7	何かを考えるとき，さまざまな角度から考える．	.53	−.07	.04	.28
9	困ったとき，自分ができることをまずやる．	.48	.05	.02	.26
6	困ったとき，ふさぎ込まないで次の手を考える．	.47	−.05	.19	.31
16	失敗したとき，自分のどこが悪かったか考える．	.40	.18	−.07	.22
21	困ったことが起きても，必ず解決の方法があると思う．	.38	.06	.23	.29
<第 2 因子　内面共有性>（α=.79)					
17	つらいときや悩んでいるときは自分の気持ちを人に聞いてもらいたいと思う．	−.09	.85	−.03	.67
22	寂しいときや悲しいときは自分の気持ちを人に聞いてもらいたいと思う．	−.12	.79	.02	.57
15	うれしくてたまらないときは自分の気持ちを人に話したいと思う．	−.08	.58	.03	.32
5	自分の考えを人にも聞いてもらいたいと思う．	.15	.54	−.08	.36
24	迷っているときは人の意見も聞きたいと思う．	.16	.50	.05	.35
25	ひとからの助言は役立つと思う．	.23	.40	.01	.29
<第 3 因子　楽観性>（α=.69）					
23	なにごとも良い方に考える．	−.05	.02	.81	.63
18	困ったことが起きても，良い方向にもっていく。	−.03	.08	.73	.54
20	困ったとき，考えるだけ考えたらもう悩まない．	.08	−.12	.48	.26
寄与率（%）		21.05	9.66	5.69	
累積寄与率（%）		21.05	30.71	36.40	
因子間相関	$F1$	−			
	$F2$	.36	−		
	$F3$	.40	.14	−	

クス回転）を3因子解によって行った．固有値1.00，因子負荷量が.35以上を基準に，下位尺度の項目内容がレジリエンスが高い者の特徴を表し，かつまとまりがあるかを考慮して，再度3因子解によって因子分析を行った (Table 1)．その結果，最終的に想定通りの3因子構造であることが確認された．Cronbach の α 係数は「意欲的活動性」は α=.79,「内面共有性」は α=.79,「楽観性」は α=.69の値を得，内部一貫性があると判断した．「楽観性」は項目数が少ないものの，ひとつの下位尺度としてまとまっており α 係数も確保しているので抽出した3因子19項目を採用した．

パーソナリティ尺度　日本語版 Junior Temperament and Character Inventory (JTCI)（青山ほか，1997）より，気質次元の「新奇性追求」(9項目)，「損害回避」(10項目)，「報酬依存」(9項目)，「固執」(6項目)，そして性格次元の「自己志向」(10項目)，「協調」(14項目)，「自己超越」(10項目）の合計68項目を用いた．JTCI は108項目からなる尺度で，成人版 TCI（木島ほか，1996）と同様，パーソナリティを4つの気質と3つの性格に分けて測定する．信頼性および妥当性は確かめられている（杉浦・青山・菅原・北村・木島，1997；菅原・青山・杉浦・北村・木島，1997）．回答形式は，「まったくあてはまらない」から「よくあてはまる」までの4段階評定で実施した．7次元モデルの各特性は，先行研究で一次元性が確認されているため，本データで各特性別に主成分分析を行い，因子負荷量が.35以下だった2項目を除く66項目を採用した．Cronbach の α 係数は，「新奇性追求」は α=.66,「損害回避」は α=.82,「報酬依存」は α=.71,「固執」は α=.68,「自己志向」は α=.72,「協調」は α=.83,「自己超越」は α=.82で，「新奇性追求」は若干数値が低いものの，内部一貫性があると判断した．これらの値は JTCI の信頼性を検討した杉浦ほか (1997) と同程度だった．また，内容的な検討もしてみたが，オリジナル尺度の内容と比して問題がない．なぜなら，本尺度はオリジナル尺度より項目数は少ないものの，オリジナル尺度の各尺度にある下位尺度をすべて含んでいるからである．

両尺度の下位尺度得点の平均値を以後の分析で用いた．データ解析には統計ソフト SPSS Ver.11.5を用いた．7次元モデルの項目例は原著者の許可を得て Appendix に記載した．

結果と考察

結果は表中では心理学の慣例に従い有意水準5% も記しているが，標本が大きいことを考慮して，有意水準1% で検討した．また，相関係数および標準偏回帰係数は絶対値が.30以上を基準に検討した．

相関分析

レジリエンスと7次元モデルの特性，および7次元モデルの特性間の相関関係を調べるために，Pearson の相関係数を男女別に算出した(Table 2)．その結果，レジリエンスと気質特性とでは，「意欲的活動性」は「新奇性追求」と負の，「固執」とは中程度の正の相関を示した．「内面共有性」は「報酬依存」と正の，特に女子は中程度の相関を示した．レジリエンスと性格特性とでは，「意欲的活動性」は「自己志向」および「協調」と中程度の（女子の「協調」とは弱い）正の相関を示した．「内面共有性」は「協調」および「自己超越」と，特に「協調」とは中程度の正の相関を示した．

7次元モデルの気質特性と性格特性とでは，「新奇性追求」と「自己志向」が中程度の負の，そして男子は「新奇性追求」と「協調」も弱い負の相関を示した．「報酬依存」と男子は「協調」とが，女子は「自己志向」「協調」および「自己超越」とが，そして「固執」と「自己志向」および「協調」とが正の相関を示した．特に「固執」と「自己志向」は男女とも比較的強い正の相関を示した．よって気質特性と性格特性とは相互に関連すること (Cloninger et al., 1993) が裏付けられた．ま

Table 2　レジリエンス尺度と JTCI の下位尺度得点の相関

	意欲的活動性	内面共有性	楽観性	新奇性追求	損害回避	報酬依存	固執	自己志向	協調	自己超越
レジリエンス										
意欲的活動性	–	.39 *	.33 **	−.33 **	−.06	.14 **	.49 **	.58 **	.54 **	.26 **
内面共有性	.29 **	–	.16 **	−.15 **	.18 **	.39 **	.24 **	.26 **	.47 **	.33 **
楽観性	.34 **	.06	–	−.02	−.22 **	.13 **	.16 **	.20 **	.20 **	.29 **
JTCI										
新奇性追求	−.34 **	−.17 **	−.04	–	−.13 **	−.04	−.34 **	−.47 **	−.37 **	−.16 **
損害回避	−.10	.16 **	−.28 **	−.14 **	–	−.12 *	−.04	−.14 **	.01	.04
報酬依存	.23 **	.58 **	.09	−.07	−.11 *	–	.24 **	.20 **	.36 **	.26 **
固執	.47 **	.24 **	.02	−.39 **	−.07	.31 **	–	.70 **	.46 **	.23 **
自己志向	.58 **	.25 **	.10	−.50 **	−.16 **	.30 **	.62 **	–	.52 **	.24 **
協調	.40 **	.54 **	.16 **	−.28 **	−.07	.52 **	.38 **	.39 **	–	.47 **
自己超越	.26 **	.34 **	.16 **	−.16 **	.15 **	.32 **	.21 **	.24 **	.44 **	–

（注．右斜め上段：男子，左斜め下段：女子．）　*p<.05　**p<.01

た，「報酬依存」と「協調」の男女全体の相関係数 (r=.46) は安藤・大野 (1998) と同程度で，先行研究の結果を裏付けた．

レジリエンスと 7 次元モデルの特性の学年差と性差

レジリエンス尺度と JTCI の得点の学年差および性差を調べるために学年 (3)× 性を要因とする 2 元配置の分散分析を行った．

学年差　レジリエンス尺度の「意欲的活動性」および「内面共有性」で学年の主効果が有意だったため Tukey 法による多重比較を行ったところ，「意欲的活動性」の得点が 1，2 年生より 3 年生の方が有意に高かった．JTCI の「新奇性追求」と「自己志向」で学年の主効果が有意だったため，Tukey 法による多重比較を行ったところ，「新奇性追求」は 1，3 年生より 2 年生の方が有意に得点が高かった．「自己志向」は 1，2 年生より 3 年生の方が得点が有意に高かった．よって，「意欲的活動性」および「自己志向」は，高学年の得点が高いことから発達的変化の可能性が推測される．

また，「新奇性追求」の 2 年生の得点が高いことは，「新奇性追求」には「どんな決まりもなしでしたいことをしていい時が好き」といった無秩序を好む側面があり，臨床的に 2 年生で規範意識がいったん低下する（黒沢，2005）という現象に符合している．これは，2 年生は新しい環境に慣れるためや高校受験の圧力を 3 年生ほど強く受けずのびのびとした状況にあるためと考えられる．よって「新奇性追求」の学年差は，気質特性は安定しているといわれる (Cloninger et al., 1993) ものの環境的要因の影響を受ける可能性を示唆している．

性差　レジリエンスの「内面共有性」において性の主効果が有意で，男子より女子の方が得点が高かった．また，JTCI の「報酬依存」，「協調」そして「自己超越」において性の主効果が有意だった．いずれも男子より女子の方が得点が高かった．「内面共有性」が男子より女子の方が高い傾向は，内面の共有を動機づけとする自己開示行為の度合が男子より女子の方が多いという先行研究（榎本，1997）と一致しており，先行研究の結果を裏付けた．また，「報酬依存」，「協調」および「自己超越」の得点が男子より女子の方が高いことは，杉浦ほか (1997) の結果と一致しており，杉浦ほか (1997) の結果を裏付けた．レジリエンス尺度と JTCI の学年別・男女別の平均値と標準偏差および分散分析の結果を Table 3 に示す．

Table 3　レジリエンス尺度とJTCIの学年別・性別平均値（標準偏差）と分散分析の結果

学年	1年生		2年生		3年生		主効果		交互作用
性別（人数）	男子（N=136）	女子（N=139）	男子（N=183）	女子（N=147）	男子（N=172）	女子（N=128）	学年（F値）	性（F値）	（F値）
レジリエンス									
意欲的活動性	2.96 (0.45)	2.93 (0.41)	3.00 (0.46)	2.94 (0.42)	3.07 (0.48)	3.19 (0.40)	13.41 **	0.10	3.27 *
内面共有性	2.72 (0.70)	3.09 (0.58)	2.72 (0.61)	3.17 (0.65)	2.90 (0.63)	3.28 (0.61)	6.23 **	81.74 **	0.29
楽観性	2.53 (0.72)	2.62 (0.69)	2.58 (0.72)	2.58 (0.75)	2.64 (0.71)	2.65 (0.85)	0.75	0.31	0.28
JTCI									
新奇性追求	2.61 (0.51)	2.63 (0.52)	2.73 (0.49)	2.72 (0.56)	2.54 (0.48)	2.61 (0.49)	5.50 **	0.53	0.39
損害回避	2.63 (0.58)	2.61 (0.64)	2.51 (0.65)	2.59 (0.60)	2.69 (0.59)	2.66 (0.65)	2.45	0.05	0.56
報酬依存	2.39 (0.53)	2.85 (0.52)	2.44 (0.49)	2.80 (0.57)	2.40 (0.55)	2.87 (0.57)	0.07	107.29 **	0.77
固執	2.71 (0.71)	2.68 (0.56)	2.68 (0.60)	2.62 (0.53)	2.65 (0.60)	2.80 (0.63)	0.91	0.12	1.92
自己志向	2.52 (0.51)	2.48 (0.41)	2.51 (0.47)	2.48 (0.42)	2.60 (0.51)	2.66 (0.47)	5.85 **	0.02	0.78
協調	2.71 (0.58)	2.95 (0.41)	2.65 (0.47)	2.87 (0.45)	2.78 (0.52)	2.97 (0.48)	3.27 *	31.02 **	0.15
自己超越	2.23 (0.63)	2.33 (0.54)	2.19 (0.63)	2.31 (0.60)	2.25 (0.61)	2.56 (0.65)	4.14 *	13.89 **	2.25

注．( )内は標準偏差．　*p<.05　**p<.01

レジリエンスと7次元モデルの特性との関連

7次元モデルは遺伝で規定される気質と気質を基盤に形成される性格という2つの下位構造をもつ (Cloninger et al., 1993) ことから，その2つが層として異なる働きをすることが予想され，かつまた気質面がより基本的な位置にあることから，階層的重回帰分析を用いて，レジリエンスに対する7次元モデルの特性の独自の関連を調べた．従属変数としてレジリエンスの下位尺度を，独立変数として第1ステップで気質特性を，第2ステップで性格特性を投入して男女別に実施した (Table 4)．その結果，第1ステップで有意な決定係数が示された．次いで第2ステップで決定係数に有意な増分が示された．レジリエンスと気質特性とでは，女子において「内面共有性」と「報酬依存」との有意な正の関連，そして「楽観性」と「損害回避」との有意な負の関連が示された．またレジリエンスと性格特性とでは，「意欲的活動性」と「自己志向」との，そして男子においては「意欲的活動性」および「内面共有性」と「協調」とでも有意な正の関連が示された．

よって仮説1-Aは「意欲的活動性」と「固執」との関連は支持されなかったものの一部が支持された．「意欲的活動性」と「固執」の関連が弱いことは次のように考えられる．「意欲的活動性」の問題解決への強い意志を表す側面は，「固執」の物事への熱心さより意志の力を中核とする「自己志向」との関連が強いためと考えられる．なお，「意欲的活動性」と「固執」および「自己志向」との関連で，「固執」と「自己志向」の相関係数（男子 r=.70，女子 r=.62）の高さから多重共線性の影響が推測されたため，VIF（分散拡大要因）を調べたところ，数値は小さく（男子は「固執」が2.06，「自己志向」が2.39，女子は「固執」が1.71，「自己志向」が2.10），VIFの指標からみると多重共線性の影響はないと考えられる．

仮説1-Bは女子の「意欲的活動性」と「協調」の関連は支持されなかったものの一部が支持された．女子の「意欲的活動性」と「協調」との関連が弱いことは次のように考えられる．中学生の時期は対人関係で，男子は「友だちと違う意見でも自分の意見はきちんと言う」といった自分を確立している意識が強く，女子はそうした独立的な意識よりむしろ「友だちと気持ちが通じ合っている」といった情緒的な結合を求め依存的傾向が強い（榎本，1999）．よって，他者の立場を尊重し受容

Table 4　レジリエンス尺度を従属変数とした男女別階層的重回帰分析の結果 (N=905)

	男子 (N=491)						女子 (N=414)					
	意欲的活動性		内面共有性		楽観性		意欲的活動性		内面共有性		楽観性	
独立変数	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2	β	ΔR^2
ステップ 1		.27		.22		.06		.28		.33		.10
新奇性追求	−.22 **		−.07		−.03		−.20 **		−.12 *		−.11	
損害回避	−.09 *		.24 **		−.24 **		−.10		.20 **		−.31 **	
報酬依存	.05		.36 **		.04		.12 *		.53 **		.09	
固執	.39 **		.14 **		.08		.37 **		.06		−.15 **	
ステップ 2		.18		.11		.07		.10		.07		.03
新奇性追求	−.03		.04		.03		−.04		−.05		−.08	
損害回避	−.03		.26 **		−.23 **		−.05		.20 **		−.34 **	
報酬依存	−.04		.25 **		−.04		−.03		.37 **		−.02	
固執	.04		−.04		−.05		.17 **		−.02		−.17 *	
自己志向	.41 **		.11		.15		.36 **		.05		−.05	
協調	.32 **		.31 **		.02		.21 **		.29 **		.18 **	
自己超越	.02		.11 *		.26 **		.05		.07		.12	
調整済み $R2$ 乗		.45		.33		.13		.38		.40		.13
F 値		41.3 **		25.8 **		8.6 **		26.6 **		29.2 **		7.8 **

注．ΔR^2 は $R2$ 乗変化量を表す．　*p<.05　**p<.01

する「協調」は自立的な側面のある「意欲的活動性」と男子の場合は関連するが，女子の場合は関連は弱いためと考えられる．

仮説 2-A は「内面共有性」と，「損害回避」および男子の「報酬依存」との関連が支持されなかったものの一部が支持された．「内面共有性」と「損害回避」の関連が弱いことは，心配性あるいは悲観的だからといって必ずしも直接的には他者とのつながりを求める心性とは関連しないためと考えられる．他者との信頼関係のような媒介要因の存在が推測される．「内面共有性」と男子の「報酬依存」との関連が弱いことは次の仮説 2-B で考察する．

仮説 2-B は女子の「内面共有性」と「協調」との関連は支持されなかったものの一部が支持された．「内面共有性」と，女子の「協調」および男子の「報酬依存」との関連が弱いことは次のように考えられる．前述のような対人関係での男女差に加えて自己開示行為の傾向は男子より女子の方が強いこと（榎本，1997）や「報酬依存」には他者の温情に依存する側面があることから，「内面共有性」と，女子の場合は「報酬依存」との，男子の場合は「協調」との関連が強いためと考えられる．

仮説 3-A は男子の「楽観性」と「損害回避」との関連は支持されなかったものの一部が支持された．男子の「楽観性」と「損害回避」の関連が弱いことについては今後の研究課題である．

仮説 3-B は「楽観性」と「自己超越」との関連は支持されなかったものの一部が支持された．「楽観性」と「自己超越」の関連が弱いことは，「自己超越」尺度が宇宙観や自然観を反映する内容であり，海外と本邦の観念の相違によるのかもしれない．文化的背景の相違を考慮し，尺度の内容を検討する必要があるだろう．また，「楽観性」に対する気質・性格特性の決定係数は有意なものの，数値が小さいことから「楽観性」には他の要因との関連が推測される．

従って，レジリエンスと 7 次元モデルの特性との関連の性差は次のようにまとめられる．男子の場合は「意欲的活動性」と「自己志向」および「協調」が，「内面共有性」と「協調」が有意な正

の関連を示し，一方，女子の場合は「意欲的活動性」と「自己志向」,「内面共有性」と「報酬依存」が有意な正の関連を,「楽観性」と「損害回避」が有意な負の関連を示した.

総合考察

レジリエンスと7次元モデルの特性との関連およびその性差，そしてレジリエンスと7次元モデルの特性の学年差と性差について検討した．階層的重回帰分析の結果,「意欲的活動性」は男女とも「自己志向」と，そして男子のみ「協調」と有意な正の関連を示した.「内面共有性」は男子は「協調」と，女子は「報酬依存」と有意な正の関連を示した.「楽観性」は女子のみ「損害回避」と有意な負の関連を示した．分散分析の結果,「意欲的活動性」および「自己志向」の得点は3年生で,「新奇性追求」得点は2年生で他学年より高かった．そして「内面共有性」,「報酬依存」,「協調」および「自己超越」は男子より女子の方が得点が高かった.

「意欲的活動性」は，気質特性の「固執」と中程度の正の相関を示すものの，性格特性の「自己志向」と，そして男子の場合は「協調」とも強い関連を示した．これは,「意欲的活動性」は，ねばり強さといった生得的傾向をもとにしつつ，個人が経験や周囲の者との関係を通して主体的に発達させていくためと考えられる．また,「内面共有性」は,「報酬依存」および「協調」と中程度の（男子の「報酬依存」とは弱い）正の相関を示し，男子の場合「内面共有性」は，相対的に「報酬依存」とは弱い,「協調」とは強い関連を示した．そして女子の場合「内面共有性」は，相対的に「報酬依存」とは強い,「協調」とは弱い関連を示した．これは,「内面共有性」は，心理面の平静を維持するために他者との関係を拠り所とする傾向であることから，情動への反応といった生得的な要因と，他者との関係のあり方といった後天的な要因の両方の影響を受け，そのため性差を反映して発達するためと考えられる．これらの「意欲的活動性」および「内面共有性」と特性との関連から，誰もが備えており，個人の努力で高めることができる (Flach, 1997) というレジリエンスの特質の一部が示された考える.

「楽観性」に対しては，女子の場合「損害回避」が関連するものの，パーソナリティ特性の決定係数は小さかった.「楽観性」の他の関連要因として，状況や出来事をどう受け取り，組織し，処理するかといった認知スタイル（水口，1998）や，出来事の原因をどう解釈するかといった説明スタイル (Seligman, 1991) のような要因が考えられる．こうした認知的な変数は，心理臨床の分野で変容が可能であることが報告されている (Beck, Rush, Shaw & Emery, 1979)．今後,「楽観性」と認知的変数との関連および「楽観性」の発達的変化の可能性について，加えて「楽観性」と「損害回避」との関連の性差についても検討を要する.

そして,「意欲的活動性」や「自己志向」に見られた学年差は，今後，中学生だけではなく幅広い年齢層を対象に縦断的な調査を行い，それが発達的変化であるかを検証する必要があるだろう．また，どのような環境や教育あるいは経験の場を提供すれば,「自己志向」や「協調」といった特性が形成され，さらにレジリエンスの向上につながるのか．この点も今後の研究課題である.

本研究では適応を促進する個人内の要因を取り上げた．個人内の要因だけが悪条件下での適応に寄与するわけではない．困難な状況下で他者との関わりなど環境的な要因が個人の特性とどのように関連して個人が適応を維持するか，その過程について調査することも今後の重要な研究課題といえる.

引用文献

安藤寿康・大野　裕　1998　双生児法による性格の研究 (1)：TCI による気質と人格の遺伝分析　日本性格心理学会第7回大会発表論文集, 28.

Ando, K.　1978　Self-disclosure in the acquaintance

process: Effects of affiliative tendency and sensitivity to rejection. *Japanese Psychological Research*, **20**, 194–199.

青山浩子・杉浦朋子・菅原ますみ・北村俊則・木島伸彦　1997　日本語版　Junior Temperament and Character Inventory (JTCI) の作成(1)　日本性格心理学会第 6 回大会発表論文集, 11.

Banks, J. K., & Gannon, L. R.　1988　The influence of hardiness on the relationship between stressors and psychosomatic symptomatology. *American Journal of Community Psychology*, **16**, 25–37.

ベック，A. T.・ラッシュ，A. J.・ショウ，B. F.・エメリィ，G.　坂野雄二（監訳）1992　うつ病の認知療法　岩崎学術出版社

(Beck, A. T., Rush, A. J., Shaw, B. F., & Emery, G.　1979 *Cognitive therapy of depression*. New York: Guilford Press.)

Benjamin, J., L., Patterson, C., Greenberg, B. D., Murphy, D. L., & Hamer, D. H.　1996　Population and familial association between the D4 dopamine recepter gene and measures of Novelty Seeking. *Nature Genetics*, **12**, 81–84.

Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R.　1993　A psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry*, **50**, 975–990.

Compas, B. E., Connor-Smith, J. K., Saltzman, H., Thomsen, A. H., & Wadsworth, M. E.　2001　Coping with stress during childhood and adolescene: Problem, progress, and potential in theory and research. *Psychological Bulletin*, **127** (1), 87–127.

Ebstein, R. P., Segman, R., Benjamin, J., Osher, Y., Nemanov, L., & Belmaker, R. H.　1997　5-HT2C (HTR2C) serotonin receptor gene polymorphism associated with the human personality trait of reward dependance: Interaction with dopamine D4 receptor (DDR) and dopamine D3 receptor (D3DR) polymorphisms. *American Journal of Medical Genetics*, **74**, 65–72.

榎本博明　1997　自己開示の心理学的研究　北大路書房

榎本淳子　1999　青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的変化　教育心理学研究，**47**, 180–190.

Felsman, C. M., & Vaillant, G.　1987　Resilient children as adults: A 40 year study. In E. J. Anthony, B. Cohler (Eds.), *The invulnerable child.* New York: Guilford Press. Pp. 289–314.

Flach, F. F.　1997　*Resilience: The power to bounce back when the going gets tough!* New York: Hatherleigh Press.

Ge. X., Conger, R. D., & Elder, G. H. Jr.　2001　Pubertal transition, stressful life events, and the emergence of gender differences in adolescent depressive symptoms. *Developmental Psychology*, **37**, 404–417.

石毛みどり　2002　中学生におけるレジリエンス（精神的回復力）尺度の作成　お茶の水女子大学人間文化研究科平成 13 年度修士論文（未公刊）

石毛みどり　2004　中学生におけるレジリエンスと無気力感の関連　お茶の水女子大学人間文化論叢，**6**, 243–252.

石毛みどり　2005　中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連：受験期の学業場面に着目して　教育心理学研究，**53**, 356–367.

Jew, C. L., Green, K. E., & Kroger, J.　1999　Development and validation of a measure of resiliency　*Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, **32**, 75–89.

梶田叡一　1992　自己意識の心理学　東京大学出版会

木島伸彦・斎藤令衣・竹内美香・吉野相英・大野裕・加藤元一郎・北村俊則　1996　Cloninger の気質と性格の 7 次元モデルおよび日本語版　Temperament and Character Inventory (TCI)　季刊精神科診断学, **7**, 379–399.

Kobasa, S. C.　1979　Stressful life events, personality, and health: An inquiry into hardiness.　*Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1–11.

Kumpfer, K. L., & Hopkins, R.　1993　Prevention: Current research and trends.　*Psychiatric Clinics of North America*, **16**, 11–20.

黒沢幸子　2005　自分自身をとりまく人間関係　BENESSE 教育研究開発センター（編）第 1 回子ども生活実態基本調査報告書　BENESSE 教育研究開発センター Pp. 66–71.

Lösel, F., Bliesener, T., & Köferl, P.　1989　On the concept of invulnerability: Evaluation and first results of the Bielefeld project. In M. Brambring, F. Lösel, & H. Skowronek (Eds.), *Children at risk: Assesment, longitudinal research, and intervention*. New York: Walter de Gruyter. Pp. 186–219.

Luthar, S. S., Cicchetti, D., & Becker, B.　2000　The construct of resilience: A critical evaluation and guidelines for future work.　*Child Development*, **71**, 543–562.

Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N. 1990 Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology*, **2**, 425–444.

水口禮治 1998 認知のしかたとパーソナリティ 詫摩武俊（編）性格 日本評論社 Pp. 68–88.

文部科学省 2004 報道発表「生徒指導上の諸問題の現状について（概要）」

森田洋司（編著） 2003 不登校――その後：不登校経験者が語る心理と行動の軌跡 教育開発研究所 Pp. 8–12.

村上宣寛・村上千恵子 1999 主要5因子性格検査の世代別標準化 性格心理学研究，**8**, 32–42.

Murphy, L. B., & Moriarty, A. E. 1976 *Vulnerability, coping, and growth: From infancy to adolescence*. New Haven, CT: Yale University Press.

中谷素之・小塩真司・金子一史・長峰伸治 2002 レジリエンスと性格特性――精神的回復力とBig Fiveとの関連 日本心理学会第66回大会発表論文集, 33.

岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢冨直美 1992 中学生の学校ストレッサーの評価とストレス反応との関係 心理学研究，**63**, 310–318.

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 2002 ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性――精神的回復力尺度の作成 カウンセリング研究，**35**，57–65.

Prior, M. 1999 Resilience and coping: The role of individual temperament. In E. Frydenberg (Ed.) *Learning to cope: Developing as a person in complex societies*. London: Oxford University Press. Pp. 33–52.

坂田成輝 1989 心理的ストレスに関する一研究：コーピング尺度（SCS）作成の試み 早稲田大学教育学部学術研究：教育・社会教育・教育心理・体育編，**38**, 61–72.

Seligman, M. E. P. 1991 *Learned optimism*. New York: A. A. Knopf.

嶋田洋徳 1998 小中学生の心理的ストレスと学校不適応に関する研究 風間書房

下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山 緑 1998 日本版NEO-PI-Rの作成とその因子的妥当性の検討 性格心理学研究，**6**, 138–147.

菅原ますみ・青山浩子・杉浦朋子・北村俊則・木島伸彦 1997 日本語版Junior Temperament and Character Inventory (JTCI) の作成(3) 日本性格心理学会第6回大会発表論文集, 13.

杉浦朋子・青山浩子・菅原ますみ・北村俊則・木島伸彦 1997 日本語版Junior Temperament and Character Inventory (JTCI) の作成(2) 日本性格心理学会第6回大会発表論文集, 12.

鈴木乙史 1992 性格はどのように変わっていくか 読売新聞社

Svrakic, N. M., Svrakic, D. M., & Cloninger, C. R. 1996 A general quantitative theory of personality developmet: Fundamentals of a self-organizing psychopathology complex. *Development and Psychopathology*, **8**, 247–272.

詫摩武俊 1967 性格はいかにつくられるか 岩波書店

詫摩武俊・大山 正・柏木恵子 1998 性格研究の課題と方向 詫摩武俊（編）性格 日本評論社 Pp. 177–215.

辻平治郎 1998 5因子性格検査の理論と実際 北大路書房

和田さゆり 1996 性格特性用語を用いたBig Five尺度の作成 心理学研究，**67**, 61–67.

Wagnild, G. M., & Young, H. M. 1993 Development and psychometric evaluation of the resilience scale. *Journal of Nursing Measurement*, **1**, 165–179.

Werner, E. E. 1986 Resilient offspring of alchoholics: A longitudinal study for birth to age 18. *Journal of Studies on Alcohol*, **47**, 34–40.

Werner, E. E., & Smith, R. S. 1992 *Overcoming the odds: High risk children from birth to adulthood*. New York: Cornell University.

谷島弘仁・新井邦二郎 1995 中学生におけるクラスの動機づけ構造の認知に関する探索的検討 教育心理学研究，**43**, 74–84.

―2005. 4. 13受稿，2005. 12. 12受理―

Resilience and Personality Traits in Junior High School Students

Midori Ishige[1] and Takashi Muto[2]

[1] Graduate School of Human Culture, Ochanomizu University
[2] Shiraume Gakuen College

The Japanese Journal of Personality 2006, Vol. 14 No. 3, 266–280

Resilience is a psychological trait that enables individuals to maintain psychological well-beings following experience of hardship. The purpose of this study was to investigate the relationship between resilience and personality traits, together with relevant gender differences, in junior high school students. Resilience Scale (RS) and Junior Temperament and Character Inventory, based on Cloninger's seven-factor model of temperament and character, were administered to 905 students. An exploratory factor analysis of RS yielded three factors: positive activity, self-disclosure, and optimism. For boys, self-directedness and cooperativeness had a positive correlation with positive activity, and cooperativeness with self-disclosure. Meanwhile, a positive correlation was found for girls between self-directedness and positive activity, and between reward dependence and self-disclosure, but harm avoidance had a negative correlation with optimism.

Key words: resilience, Junior Temperament and Character Inventory (JTCI), junior high school student, gender difference

Appendix　JTCIの項目例

下位尺度		項　　目
新奇性追求	21	私は，ぜったいに決まりは守ります．（逆）
	24	私はどんな決まりもなしで，自分たちのしたいことをしていい時が好きです．
	47	私は，親に見つからないと思ったら，やってはいけないと言われたことでもやってしまいます．
損害回避	10	私は，はずかしがりやなので，知らない人に会うのはきらいです．
	54	新しいことをやってみる時，私は心配になります．
	65	私は，知らない人と会わなければならない時，会う前はとても心配してしまいます．
報酬依存	35	私は，友だちに自分の秘密を隠したりしないと思います．
	53	私は，気持ちが落ち着つかない時，ひとりでいるよりもだれかにそばにいて欲しいです．
	58	私は，悲しい映画を見ると泣いてしまいます．
固執	20	私は，時間のかかることは，最後までやりたくないです．（逆）
	32	私は，どんなことにも友だちよりがんばります（家でたくさん勉強する，スポーツの練習，楽器の練習をするなど）．
	48	私は，きちんと正確にできるまで，それをやり続けます．
自己志向	33	私は，やっかいなことでも何とか解決することができます．
	61	私は，練習をしているのでいろんなことをうまくやれます．
	64	私は，どういう目標を自分で立てたいか，自分でよくわかっています（新しいことを学ぶ，よい成績をとる）．
協調	5	私は，みんなが幸せになるように，がんばっています．
	17	私は，友だちの気持ちがわかります．
	23	私は，友だちを助けたいと思います．
自己超越	41	私は，いつも夢のようなことを考えています．
	44	私は，生き物が本当につながっているように感じています．
	68	私は，神様のような不思議な力がわたしを助けていると信じています．

注．番号は質問紙の項目番号を示す．（逆）は逆転項目を示す．